研究ノート

イラン、カスピ海南西岸域における鉄器時代移行期の様相

―触角状突起付青銅剣身の分析を中心に―

有松 唯

An Analysis of Bronze Swords with Feeler-like Projections from the Bronze and Iron Ages of the Southwestern Caspian Coast, Iran

Yui ARIMATSU

カスピ海南西岸域で得られた触角状突起付青銅剣身を検討した結果、形態的差異から６類型に分類することが可能であった。さらに機能的側面を重視すると、その形態差は通時的変遷を示していると仮定できる。また、すべての型式はトランスコーカサスからカスピ海南西岸域にかけての地域でのみで副葬品として出土しており、且つカスピ海南西岸域からは古式のものと新式のもの双方が出土していることがわかる。さらにこの地域では、最新式段階である６類はカスピ海南西岸域においては特定の墓にしか副葬されない。副葬品が豊富で、且つ葬送慣習にトランスコーカサス方面の要素がみられる墓である。こうした分析の結果、少なくとも剣という一側面に関しては、カスピ海南西岸域は青銅器時代から、より北方の地域と単一の文化圏を共有していたと想定できる。そしてその関係は時を経るにつれて社会の中で重視されるようになり、それに伴って剣も儀器化していった可能性が示唆される。このことは初期鉄器時代文化が一過性にイラン北東方面に由来し、青銅器時代と鉄器時代の文化は断続的であるという従来の見解とは異なった側面を示唆するものである。

キーワード：イラン鉄器時代、トランスコーカサス、インド・ヨーロッパ語族、青銅剣、葬送慣習

This paper examines the transitional phases from the Bronze Age to the Iron Age in the southwest coastal region of the Caspian Sea, north Iran. The material used for analysis consists of bronze swords with feeler-like projections. These kinds of swords can be divided into six types. Differences among these types reflect chronological gaps. All of them were excavated from cemeteries in Transcaucasia and the southwest Caspian coast. Type 6 swords were excavated from special graves on the southwest Caspian coast that have many artifacts and elements similar to Transcaucasia.

Bronze swords with feeler-like projections indicate that the southwest Caspian coast shared the same cultural sphere with Transcaucasia from the Bronze Age to the Iron Age. Furthermore, this relationship would have become more important in the Iron Age. This indicates that the Iron Age Culture was not completely derived from the northeast of Iran and material culture and associate traits had not totally ceased at the beginning of the Iron Age.

Key-words: Iron Age of Iran, Transcaucasia, Indo-European language family, bronze swords, funeral practices

はじめに―問題提起と研究の目的―

イランにおいては青銅器時代から鉄器時代にかけての時期に物質文化が大きく変化したことが知られており、どうしてそのような変化が起こったのか、鉄器時代の物質文化はどのように形成されたのかという点は、イラン考古学では常に議論の対象となってきた（Dyson 1977; Medvedskaya 1982; Mousavi 2001, 2005; Young 1964, 1967）。そうした中で、イランの鉄器時代を代表する墓地遺跡が多く存在するカスピ海南西岸域からは、その物質文化を代表する考古遺物が多数得られてきた（図１）。また、鉄器時代初頭に位置付けられる遺跡や資料も豊富に存在する。それに対して当該地域では青銅器時代以前の遺跡や資料の存在はあまり認識されてこなかった。しかし、上記のような当該地域の位置付けを考慮すれば、この地域における鉄器時代への移行期の様相を解明することはイランにおける鉄器時代開始の議論に大きく寄与することになると考えられる。

こうした点をふまえて、本研究ではカスピ海南西岸域に特徴的に見られる遺物の１つである触角状突起付青銅剣身

西アジア考古学　第９号　2008 年　131-141 頁
Ⓒ 日本西アジア考古学会

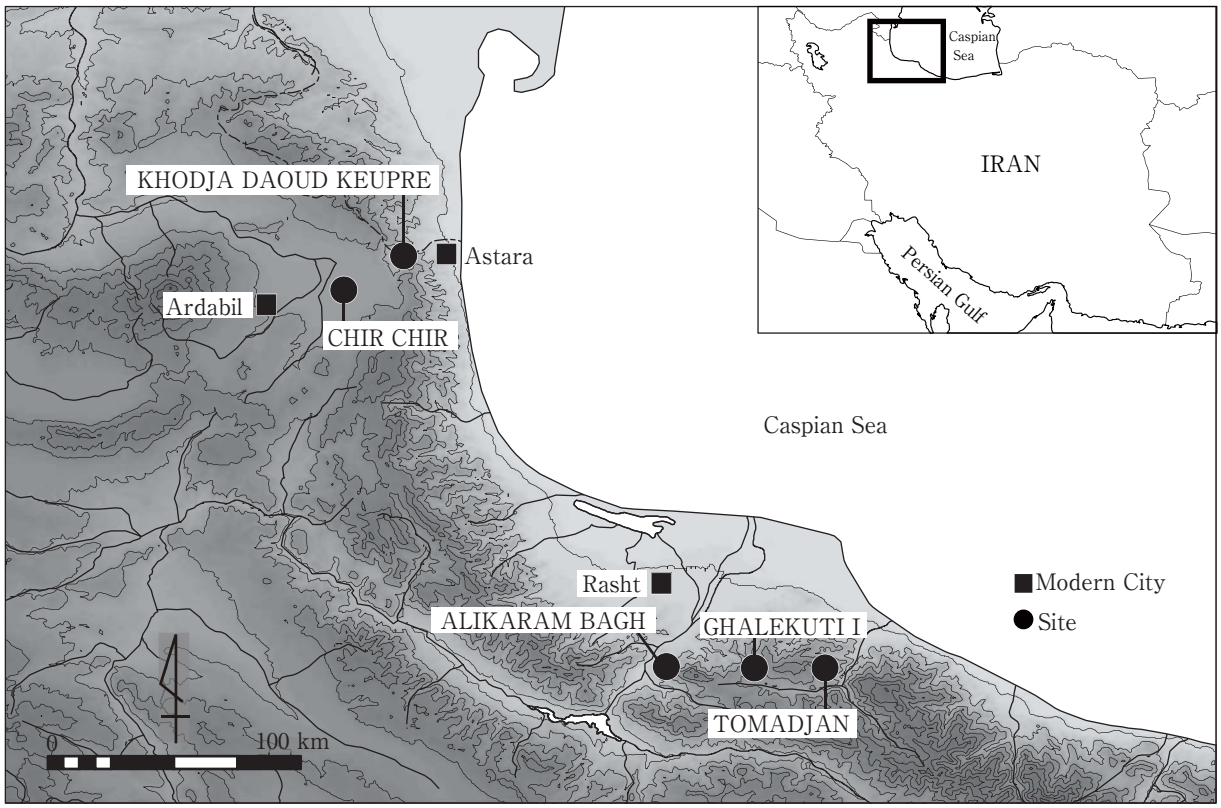

図１　カスピ海南西岸域で発掘された青銅器時代及び鉄器時代の遺跡

をとりあげたい。後述するように、この剣身は青銅器時代に遡る系統関係が想定でき、当該地域における上記のような研究を可能にすると考えられるためである。だが、その一方で、この剣身自体の分類や編年は詳しくは行われてこなかった。また、複数地域から出土していることは既に指摘されているが（Medvedskaya 1982; 津本 2002）、それらの関連性等は詳細には明らかになっていない。そこで本稿ではその編年と分布、出土状況を検討し、この特徴的な遺物から当該地域における初期鉄器時代の様相について考察してみたい。

分析の対象と方法

１．分析方法

触角状突起付青銅剣身は墓の副葬品としての出土例しか確認されておらず、そうした遺構同士の切りあい関係なども報告された例がない。共伴する遺物から詳細な年代上の前後関係を推測することも困難である。

そこで、本分析では触角状突起付青銅剣身自体の型式変化からこの剣身の相対編年を導くことにする。具体的には関、茎、身及び脊の平面及び断面形態の差異に着目して分類をおこない、さらに機能的変化を想定してその形態差からこの剣の編年案を提示したい。

また、その型式変化に沿って分布を把握し、カスピ海南西岸域と同系統の剣を共有する範囲を示した上で、そうした諸地域における出土状況からこの剣の機能や役割も明らかにしていきたいと思う。

２．分析対象資料－触角状突起付青銅剣身の位置づけ－

分析の対象としたのは触角状突起付青銅剣身である。この名称は津本英利氏の「触角状の突起を肩部にもつ独特の長剣」（津本 2002: 8）という記述をもとにしている。津本氏も指摘しているとおり、この剣身の最大の特徴は触角状の突起にある。このような突起状の部位が形成される剣はめずらしく、それによりこの剣身を区分することができる。

ここで、この剣身の位置づけを明確にするために、イランにおける青銅製利器研究の概要についてまとめてみたい。イランに関してはルリスターン青銅器が比較的よく知られており、それと関連させて青銅製品研究もまた盛んであるといえる。利器以外も含めた大まかな器種分類や地域性の抽出、編年（Dyson 1964; Medvedskaya 1982; Moorey 1971）、メソポタミアとの関連性（足立 2004）や鉄の導入を視野に入れたバイメタル製品の研究など（足立 2003; 紺谷 2001）が行われてきた。そのような研究では主に、厳密には一鋳式でない場合も含め、柄まで青銅で製作された剣や鏃、斧等が対象とされてきた。一方で、剣身、槍先、鉾といった製品は対象とされる機会が相対的に少なかったように思われる。そうしたなかで、今回対象とする触角状突起付青銅剣身は剣身のなかでも少数でありながら

柄を伴う剣と一括して分析対象とされる場合がみられる。それはこの剣身の形態上の特異性と、初期鉄器時代にイランの北方から出土する特徴的な遺物の１つであることによると思われる。

本稿で対象とした触角状突起付青銅剣身は計 20 点である。そのうち、出土地不明ながらも実見できたのは天理大学附属参考館所蔵の４点、中近東文化センター附属博物館の２点である。一方、出土資料はアリ・キャラム・バーグ（Ali Karam Bagh）から１点（Negahban 1996: 266, Fig. 33-735）、ホドジャ・ダウド・ケウプル（Khodja Daoud Keupre）から１点（Schaeffer 1948: PLANCHE. LIX）、チル・チル（Chir Chir）から１点（Schaeffer 1948: Fig. 224-C）、トマジャン（Tomadjan）から最低２点（Samadi 1959: Fig. 32, 34）、ガレクティⅠ号丘（Ghalekuti I）から９点がそれぞれ得られている。このうち実見が可能だったのは東京大学総合研究博物館所蔵のガレクティⅠ号丘Ｅ区６号墓出土の１点である。それ以外の資料については各報告書中の図版及び記載を参照して分析を行った。

分析

１．分類（図 2、3）

以下、実見することのできた資料を中心に、分類ごとに記述していきたい。

１類（図 2-1）

身部は平面形態をみると鋒にむかって先細る。脊の厚さは８～ 6mm である。関部の断面形態をみると端部が肥大化し、平面形態では丸みを帯びる。茎は脊が延長して形成され、断面はほぼ円形だが、先端は扁平で鋭利になる。

本類型は触角が形成されないが、触角状突起付青銅剣身の祖形と考えられる。それは関の厚みと茎の形態に拠る。特に２類や３類では触角が形成される剣の関が肥大化しており、かなりの厚みがある。また、後に詳述するが、茎の端部は扁平化し、且つ茎の径よりも若干広がる。こうした点は触角状突起付青銅剣身に特徴的なものであるため、同様の特性を共有する本資料を触角が確認されないながらも触角状突起付青銅剣身に強い関連性のあるものと判断し、積極的に対象とした。

２類（図 2-2）

身の平面形態、断面形態ともに１類と同様である。脊も明瞭であり、茎につながる。ただ、関と翼の境界が明瞭でなく、全体的に断面形が山形となる。平面形態で見た場合１類と異なるのは関が茎のほうにやや突出することである。茎は先端が扁平になる点は同様だが、全体的に錐状で、断面は隅丸方形である。

３類（図 2-3）

剣身の平面形態は上記２類とほぼ同様である。そのなかで分類上顕著な特徴は、関の端部が２類よりもさらに突出し、触角状になることである。その突出部の長さは茎にほぼ匹敵する。さらに身部を観察すると脊が低くなり、翼も含めた断面形態が２類よりも扁平である。茎は断面が隅丸方形、細く小型になっている。端部は扁平であるものの恣意的に形成されたとは断言し得ない。

４類（図 3-1）

この類型は茎がさらに小規模で、３類と比べて触角状突起が発達し、茎の長さを上回る点が特徴。茎は脊の延長であるものの、断面がより方形である。

５類（図 3-2）

この類型の最大の特徴は、身部の平面形態が全体的に幅広い点である。大部分が一定の幅を保つ。脊の幅は相対的に狭く、断面形態をみると高さも無い。さらに翼との境界も不明瞭なため、断面形は３類と比較してさらになだらかである。関部には４類と同様の突起が確認でき、茎よりも長さをもっている。茎との長さ比からみれば突起がより発達したものと捉えられるが、一方で非常に薄い。茎は断面方形で先細り、方錐体を呈する。

６類（図 3-3）

この類型の身部の平面形態にみられる大きな特徴は、身部下半が緩やかに内湾し、抉りがはいる点にある。また、全体的に５類よりもはるかに幅広である。脊も幅広で、且つ断面形態をみると山形は呈さず、全体的に平坦である。翼も平坦で厚みも一定となる。関部に形成される突起は５類と同様板状を呈する。茎は断面円形のものと方形のもの、双方がみられるがいずれも錐体になる。突起が残存している例をみるといずれも茎は突起よりも短い。

２．編年

本稿では上記各類型間の形態上の差異を１類から６類へという時系列に沿った通時的変化であると捉えたい。このことを支持するのは、１類から６類という順に変化していると仮定した場合、その変遷が一貫した方向性に沿っていると解釈できることに拠る。その方向性とは、実用具から非実用具へという機能上の変化である。触角状突起付青銅剣身の場合、徐々に武器としての機能が退化していく過程が想定できる。

その際、関に形成される突起及び茎と、身の幅及び厚みに注目したい。身部があまりに薄く幅広であれば殺傷機能が限定され、そのための強度を保つことも困難になると想定される。また茎は柄を固定するのに不可欠な部位のため、そこが十分に機能していなければ実用的な武器として用いることは困難だろう。一方、関に形成される突起は、現時点では実用的目的を想定できない部位である。鍔やかえしに近い機能があったとも考えられるが、あまりに薄く且つ

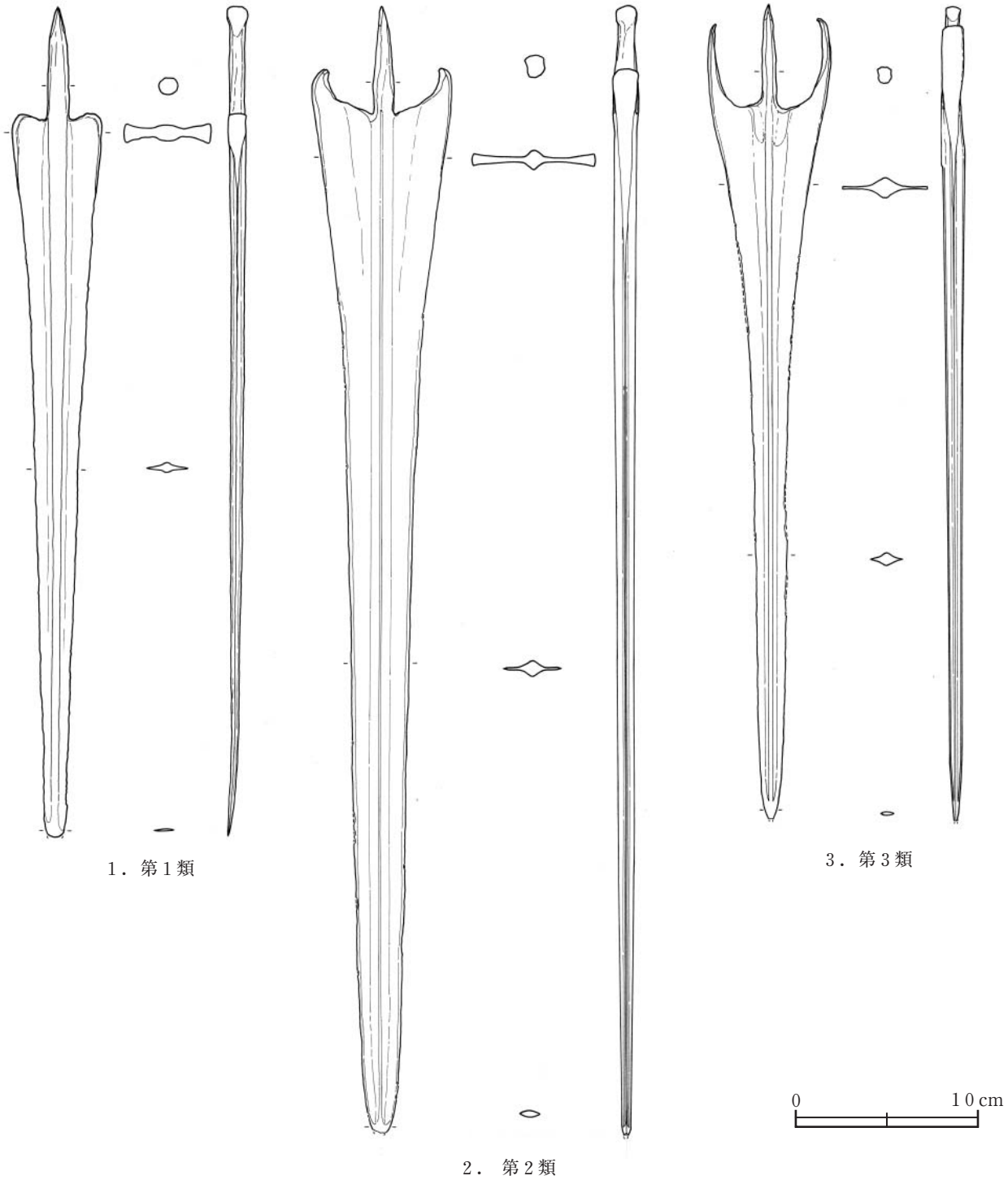

図２　触角状突起付青銅剣身分類案
１：天理大学附属天理参考館所蔵、２～３：中近東文化センター附属博物館保管

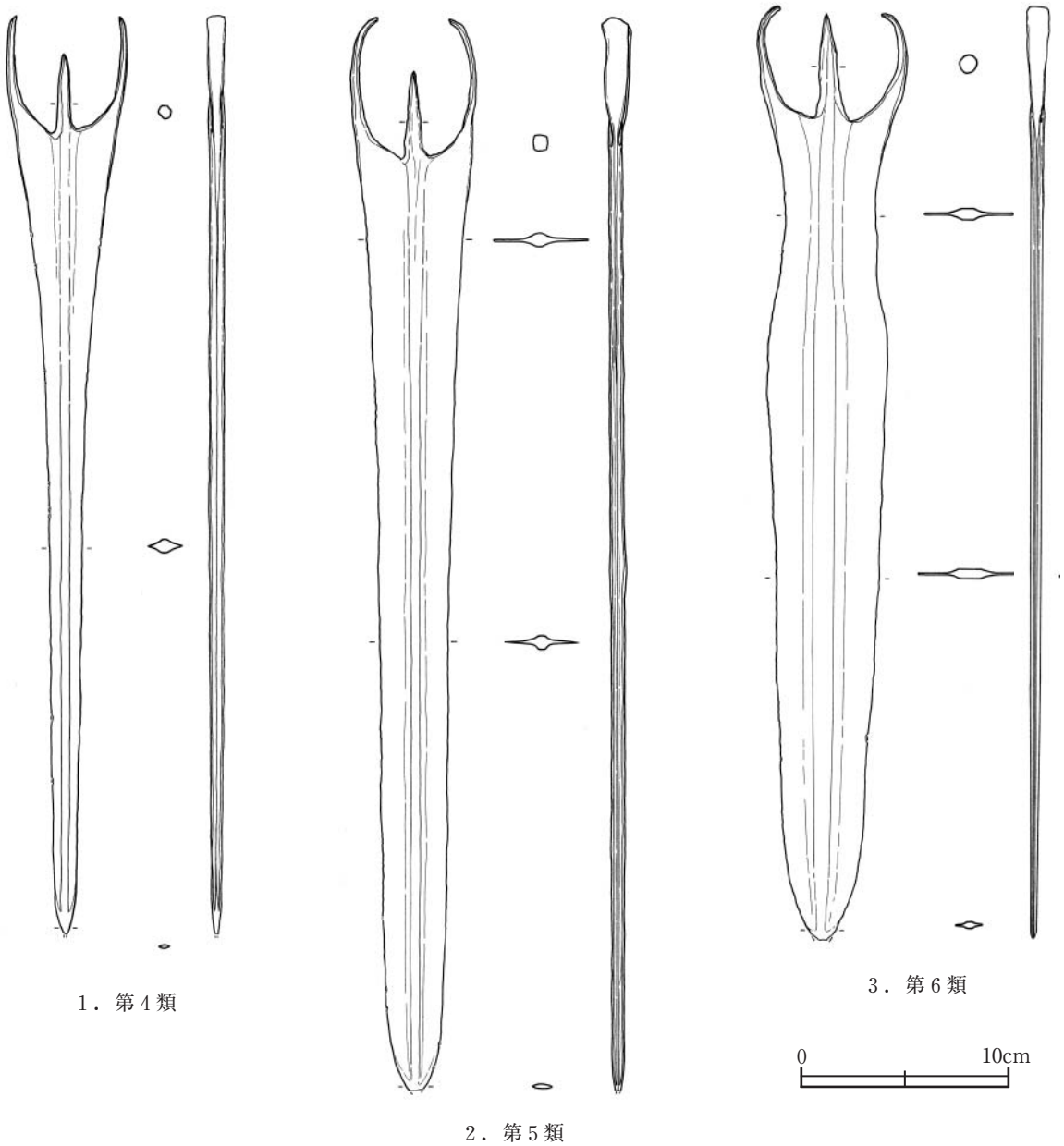

図3　触角状突起付青銅剣身分類案
1～3：天理大学附属天理参考館所蔵

長くなるとその効果は期待できず、むしろ装飾的な意味合いのほうが強かったのではないかと思われる。このような武器として不可欠な身及び茎の形態的差異とそうではない突起の形態的差異の傾向を比較し、その相互関係から上記の機能上の変化を具体的に示したい。

まず、関に形成される突起である。剣身の厚さに対する突起の厚み及び剣の全長に対する突起の長さの比率をそれぞれみてみると、突起は特に5類や6類で薄く、且つ6類が一番長いという傾向が指摘できる（図4-1, 4-2）。特に5類や6類では厚みは1mmを下回る場合もあり、欠損している例が見られることからもその部分の脆さは明らかである。この段階でこの部位に実用性があったとは想定し難い。

こうした必要性のない部位の発達に伴い、機能上不可欠と考えられる茎について逆の傾向が指摘できるという点は重要だろう。剣の全長に対する茎の長さの比率をみてみると、茎は突起とは逆に、1類が最大で、6類が最小となる（図4-3）。また、茎は大きさ自体が縮小していくのと同時にその形態も変化すると仮定できる。1及び2類では茎の端部は身に対して垂直に扁平になり、さらに扁平部分は茎の径よりも張り出すことから、柄の固定を助けていたと考

えられる。しかし 6 類になると単純な錐形で長さも短く、実戦に耐え得る強度で柄を固定できたとは想像し難い。

このことは平面形態及び断面形態の比較からも指示される。全長に対する身幅の比率と厚みの比率をみると、6 類が最も幅広で薄い（図 4-4, 4-5）。さらに 5 類や 6 類は翼が幅広く薄いので、武器として用いれば破損する可能性のほうが高いように思われる。

このようにみてくると、1 類から 6 類へと変化がしていくと捉えた場合、すべての部位の傾向に相関関係が見出せる。このことから、1 類から 6 類へと、徐々に武器としての機能が失われていっていることは明らかといえよう。これはそうした武器本来の機能の喪失過程としてとらえる事ができる。

この逆の流れも勿論想定し得る。しかし、4 類の出土したホドジャ・ダウド・ケウプルとチル・チルの帰属年代はそれぞれ前 1550 ～ 1450 年及び前 1500 ～ 1400 年とされている（Schaeffer 1948: 443）。一方、6 類の出土したガレクティ I 号丘 A 区 V 号墓、A 区 VII 号墓、E 区 6 号墓はすべて前 1450 ～ 1250 年に位置づけられる（西秋他 2006: Fig. 3）。このことからも 1 類から 6 類へという変遷が支持されよう。

以上より、本稿では上記の機能喪失過程を時間軸に沿うものととらえ、1 類から 6 類へという編年を提示したい（図 5）。ただ、4 類から 5 類にかけて厚み等が急変することからこの間にはいる型式が存在するとも考えられるが、現時点では定かではない。

3．分　布

出土例が報告されているのは 2 類、4 類、6 類のみである。

2 類に類するものはアリ・キャラム・バーグ遺跡の墓から出土した（Negahban 1996: 266, Fig. 33-735）。この遺跡はカスピ海南西岸域に流れるセフィード・ルード（Sefid Rud）川の東岸に位置し、イランの鉄器時代を代表する遺跡として著名なマールリーク（Marlik）遺跡の近隣にある。この遺跡の年代は明示されていないが、前述したように 2 類より新式の 4 類が前 1550 ～ 1400 年とされている。加えてイランの鉄器時代を前 1450 年以降とする年代観を考慮すれば 2 類は青銅器時代の資料ということになり、同時にこの遺跡も同時代に遡る可能性が指摘できる。

4 類はトランスコーカサス方面のホドジャ・ダウド・ケウプル（Schaeffer 1948: PLANCHE. LIX）とチル・チル（Schaeffer 1948: Fig. 224-C）から出土している。報告されているのは各 1 点である。ともにカスピ海西岸に位置している。

6 類の出土例は最も豊富である。まず、チャーク・ルード（Chak Rud）川流域のガレクティ I 号丘で最も多く出土している。A 区 V 号墓から 5 点（江上編 1965: PL. LIV-36-40）、A 区 VII 号墓から 1 点（同: PL. LXII-12）、E 区 6 号墓から 3 点である（深井他編 1971: PL. LII-1-3）。さらに、同じくチャーク・ルード川流域に位置するトマジャンからも出土している（Samadi 1959: Fig. 32, 34）。さらに、同様の剣の出土がトランスコーカサスでも指摘されている（Medvedskaya 1982: 75）。

一方、同時期のイランにおける他地域の剣を参照すると、突縁式の柄をもつ剣がルリスターン（Overlaet 2003: Pl. 142-10、Pl. 16-6-3、Pl. 90-61、Pl. 44-2、Pl. 132-10-5, Pl. 134-13-9, Pl. 135-15-8、Fig. 18、Pl. 15-2, 4、Pl. 158-4, 5, Pl. 182-43, Pl. 186-7, Pl. 193-5, Pl. 200-5, Pl. 204-5, 6、Pl. 64-18, 19, Pl. 70-19, 20, Pl. 90-57 ～ 60, Pl. 96-39 ～ 42, Pl. 1000-27 ～ 29, Pl. 116-13, Pl. 120-21 ～ 24）やアゼルバイジャン（Dyson 1964: fig. 2-1）を中心に特徴的に見られる。同様の剣はカスピ海南西岸域（深井・池田編 1971: PL. XLV-35）やトランスコーカサス方面（Schaeffer 1948: Fig. 217-3）でも出土しているが、その逆に、触角状突起付青銅剣身がこれらの地域で出土した例はない。系統関係が想定できる類例等も現時点では指摘することはできない。

こうしたことから、現時点で確実にいえるのは、触角状突起付青銅剣身の分布はカスピ海南西岸域とトランスコーカサス方面の地域に限られることである。さらに、カスピ海南西岸域では青銅器時代と鉄器時代という時期幅をもって触角状突起付青銅剣身が出土するということも、あらたな見解として提示したい。

4．出土状況

2 類はアリ・キャラム・バーグ遺跡の 2 号トレンチから出土した（Negahban 1996: 266）。具体的にはそのトレンチ中で検出された墓から出土したため、副葬品ということになる。出土した墓自体に関する報告の記述は少なく、「精緻なつくりの長方形の墓」（Negahban 1996: 24）という記載のみである。報告書に掲載されている墓の写真（Negahban 1996: PLATE 4-B）をみると竪穴墓で、墓壙の壁面には石が積まれているようであり石槨墓のようにみえるが定かではない。被葬者についても「部分的」に残存しているにすぎず（Negahban 1996: 24）、埋葬姿勢等への言及もない。単葬なのか複葬なのかという判断もされていない。一方、共伴したとされるほかの遺物をみると（Negahban 1996: Table 1）、金、紅玉髄、瑪瑙、輸入石材製の装飾品や貝製品、石鏃、土器等がある。被葬者の人数等不明であるため判断は難しいが、豊富な副葬品といえる。それは墓の造り自体が「精緻」であることとも矛盾しない。

ホドジャ・ダウド・ケウプルとチル・チルはともに墓地

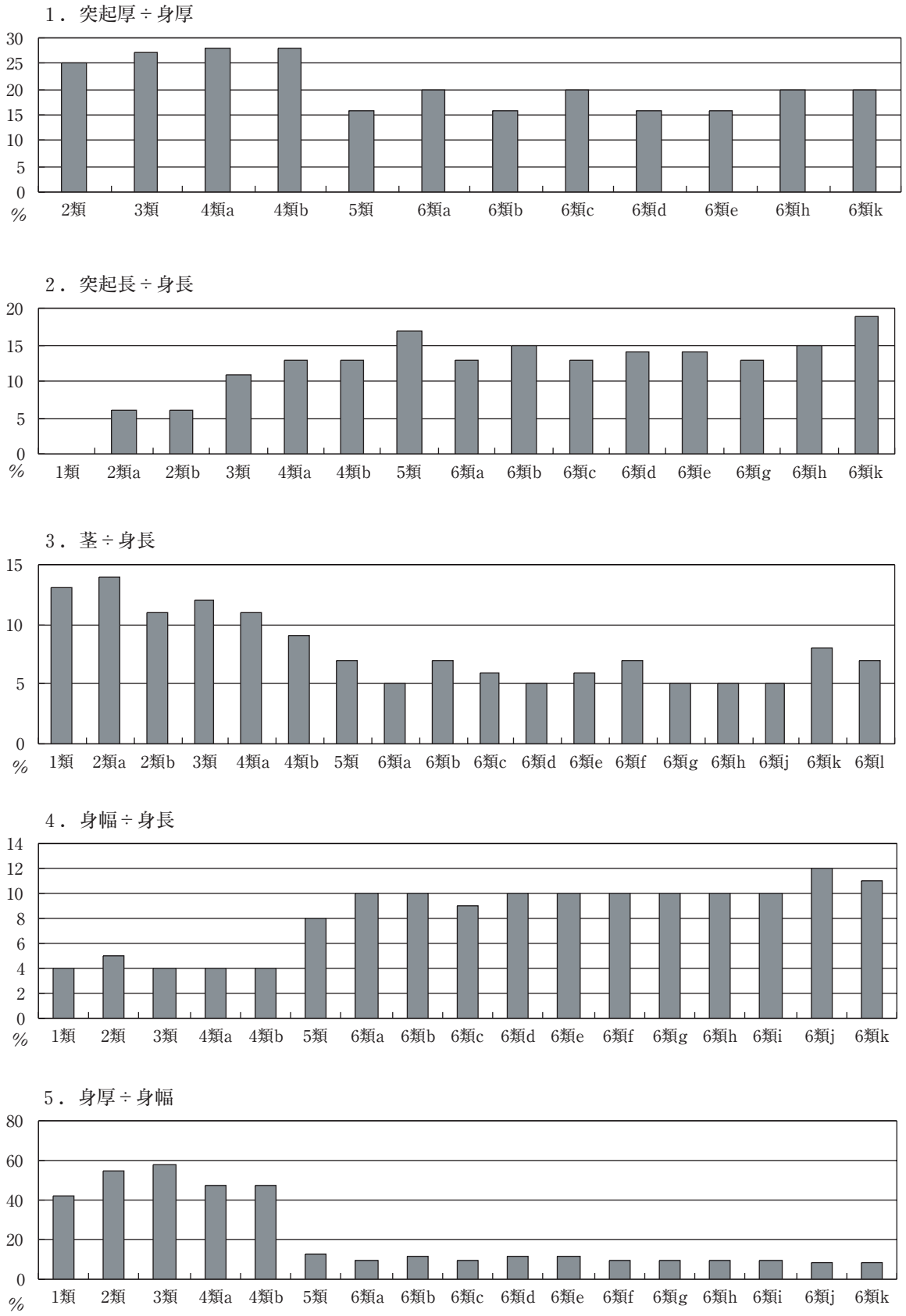

図4　触角状突起付青銅剣身各部位の比率による類型間比較

※各類型に付したアルファベットは個体識別のため便宜的に用いたものであり、それ以上の意味はもたない。

で、4 類はその副葬品として出土した。そこでの墓の具体的な構造は不明だが、地表面に環状の石列を有するようである（Schaeffer 1948: Fig. 31, 420）。同一遺跡から出土した遺物をみると前者では青銅製の利器や貴石類、紡錘車等が出土している（Schaeffer 1948: PLANCHE. LIX）。後者でも他タイプの青銅製利器が複数出土している（Schaeffer 1948: Fig. 224-C）。ただし、これらとの具体的な共伴関係は不明である。

6 類が 5 点出土したガレクティ I 号丘 A 区 V 号墓は木槨墓である（江上編 1965: 14）。石槨墓が中心のこの地域の墓の中では例外的といえよう。この墓が特異なのはそればかりではない。墓の規模も、地表から床面までが 240cm、東西辺 390cm、南北辺 360cm と他の墓壙と比較するとかなり大規模である。また、墓壙の位置も A 区の墓域のなかで明らかに中心を占める（江上編 1965: PL. XLI）。被葬者の埋葬姿勢は両肘両膝を屈曲させた仰臥屈葬で、特にトランスコーカサス方面との類似が指摘されている（江上編 1965: 45）。他の被葬者では仰臥伸展葬や横臥伸展葬が一般的なことを考慮すればこの点もまた特異といえよう。5 型は床面から出土したが、4 点は東壁際に、1 点は被葬者の右側に沿うように置かれていた（江上編 1965: PL. L）。V 号墓は他の副葬品も豊富で、多量の土器や青銅製品、貴石類があわせて出土している（江上編 1965: PL. LII-LVII）。

6 類が 3 点出土した E 区 6 号墓も A 区 V 号墓との共通点が多い。まず、被葬者の埋葬姿勢が同様に両肘両膝を屈曲させた仰臥屈葬である（深井他編 1971: 37, PL. XV, L）。上記のようにこの埋葬姿勢はめずらしく、カスピ海南西岸域ではこれら 2 つの墓壙でのみ確認されている。さらに、6 類は V 号墓と同様に被葬者の右側に置かれていた。また副葬品も豊富である。ただ、A 区 V 号墓とは木槨墓ではなく石槨墓であるという点で異なる。しかし写真等から判断すると極めて堅緻な造りで（深井他編 1971: PL. XIII, L-LI）、墓壙の造営に相対的に多くの労力を費やしたという点では同様といえるかもしれない。一方、6 類が 1 点出土した A 区 VII 号墓は同じく石槨墓だが、6 号墓と比較すると規模は小さい（江上編 1965: PL. LXI）。遺物も相対的に少なく、土器が 8 点、青銅製品が他に 2 点、貴石類が 9 点ほどである（江上編 1965: PL. LXII）。

6 類はトマジャンでも墓の副葬品として出土した。同遺跡からは青銅製の他種の利器や装飾品も出土しているようだがそれらとの共伴関係は不明である。6 類自体何点まとめて出土したかなど、詳細は明らかになっていない。出土遺物の集合写真（Samadi 1959: Fig. 32）から判断すると、遺跡全体で少なくとも 2 点は出土したようである。

以上より、すべて副葬品である点が出土状況からみた触角状突起付青銅剣身の特徴であるといえよう。

分析結果

触角状突起付青銅剣身は形態の差異から 6 類型に分類することが可能であった。本稿ではその差異を武器としての機能が喪失していく過程としてとらえ、時間的な変化に伴うものという案を提示した。さらに、剣については今回の分析で、カスピ海南西岸域で出土する鉄器時代あるいは青銅器時代の剣身と、より北方のトランスコーカサス方面から出土する青銅器時代の剣身という、時期的、地理的に離れていたものを 1 つのまとまりとして捉えることができた（図 5）。

また、分布状況からみた場合でも、トランスコーカサスからカスピ海南西岸域にかけての地域に限定されるということが明らかになった。さらに出土状況をみてみると、すべて墓の副葬品である点が特徴であるといえる。

特に 6 類はカスピ海南西岸域においては特定の墓に複数一括して副葬される傾向がある。そうした墓はとりわけ造りが精緻で副葬品が豊富、さらに埋葬姿勢などの葬送慣習にトランスコーカサス方面の要素がみられる点が共通項である。こうした点を重視すると、剣自体が武器という実際の機能以外の特別な意味合いをもっていたのではないかとも想定される。他の類型に関して不明な点が多いため、このことが 6 類のみに当てはまるか否かは断定できないが、少なくとも 6 類が特異な扱われ方をしていたことは確かであるといえよう。また、このことは、編年の際に記述した、6 類段階での儀器化という見解とも一致すると思われる。

考察ー初期鉄器時代のカスピ海南岸域とトランスコーカサスー

従来、カスピ海南西岸域も含めたイラン北部における青銅器時代から鉄器時代への移行に関しては、土器の研究成果から、東北部から文化あるいは人が短期間に侵入したという説が有力であった。そして、それにより、青銅器時代と鉄器時代の文化は断続的なものと捉えられがちであった（Young 1964, 1967）。そうした解釈や考古資料の捉えかた自体に対する反論も呈されてはきたが（Dyson 1977; Medvedskaya 1982）、現時点でもなおその説が重視されていることには違いない（Mousavi 2001, 2005）。

だが、今回の分析で、カスピ海南西岸域から特徴的に出土する剣については青銅器時代、鉄器時代双方にわたってトランスコーカサス方面と共有されていたことが指摘できた。また、今回提示した編年によると、時期差をもって一方的な流れでこの剣がもたらされていたわけではないと解釈できる。そうなると、少なくとも剣という一側面に関しては、両者が単一の文化圏を共有していたと捉えらえられ

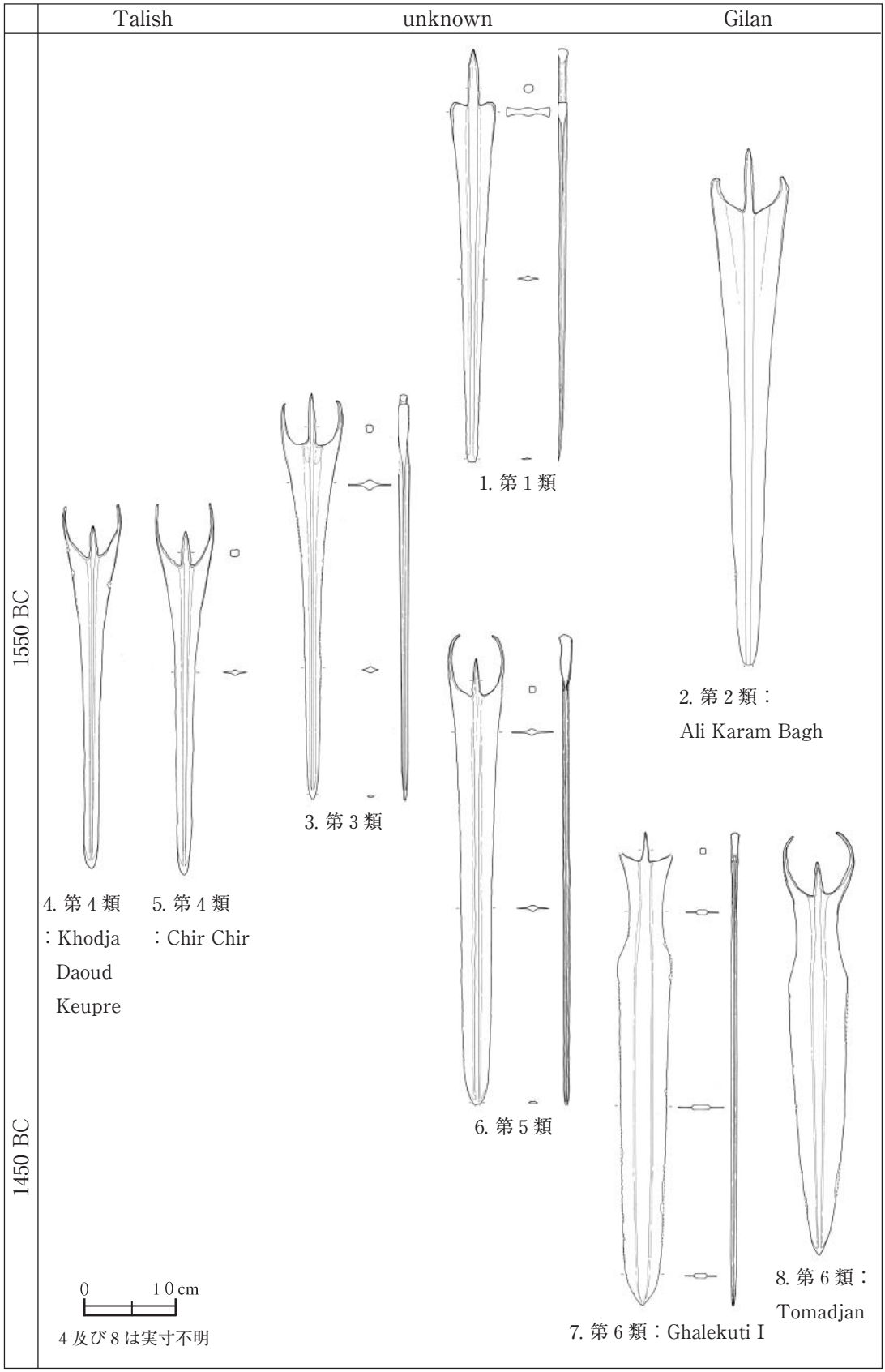

図 5　触角状突起付青銅剣身編年試案
2 ： Negahban 1996 より、4 ・ 5 ： Schaeffer 1948 より、8 ： Samadi 1959、より それぞれ改変

る。トランスコーカサスやカスピ海南西岸域はともに湿潤な気候であり、地理的障壁にも隔たれてはいない。トランスコーカサスには、イランの青銅器時代並行の時期に、高度な金属加工技術が存在したことで知られている。同時に、カスピ海南西岸域をはじめとする地域の鉄器時代の物質文化の特性の１つとして青銅製品を中心とする金属製品の多用が挙げられていることから、両者のあいだでの何らかのやり取りを想定することはあながち見当違いではないだろう。そのことは、時期ははずれるものの、バイメタル剣の分析等から、イランの鉄文化の起源としてもトランスコーカサス方面の重要性が指摘されている（紺谷 2002; Kontani 2005）ことからも支持される。同様の事象が鉄器時代の初期の段階で起こっていたとしても不思議ではないだろう。そうした点からも、両者が共通した文化要素をもつということは蓋然性が高いといえる。

以上のように、剣から見た限り、カスピ海南西岸域は青銅器時代からトランスコーカサスと単一の文化圏を共有していた側面があったと考えられる。加えて、カスピ海南西岸域から出土する剣には時期的な隔たりがあると想定される。2 類は青銅器時代に年代付けられるのに対して、6 類は鉄器時代に年代付けられるためである。このことから、この共有関係はある程度の時間幅をもって持続していたと解釈できる。すなわち両地域の関係はたとえ鉄器時代になって東方からあらたな文化あるいは人がはいってきたにしても、継続していたと考えられるのである。

こうしたことは、ガレクティＩ号丘ではこの剣が同様にトランスコーカサス方面と類する他の葬送慣習と相関して出土することからも指示される。ガレクティＩ号丘の物質文化とトランスコーカサス方面の物質文化との類似性は従来から指摘されてきた（江上編 1965: 84-94）。ガレクティＩ号丘Ａ区Ｖ号墓と同Ｅ区 6 号墓の被葬者の埋葬姿勢はイラン内陸部には類例がなく、クルガンに伴い、黒海沿岸を中心に展開したものである（江上編 1965: 45）。重要なのは、鉄器時代においては剣を含めたこうした要素がガレクティＩ号丘の中でもとりわけ豊富な副葬品を伴う、特異な墓に限ってみられるという点である。このことを積極的に考慮すれば、鉄器時代初期の葬送慣習あるいは地域社会の中で、そうした北西地域と共通する要素はむしろある程度重視され、特別な意味合いをもっていたとも考えられるのである。この時期に両地域の関係が、部分的であれ強化されたとも解釈できる。

そうだとすれば、この剣はそうした側面を象徴的に示していた副葬品としてとらえられよう。それ以前も副葬品に特化した剣ではあったが、鉄器時代以降とりわけ象徴的に扱われる点は特異であるといえる。したがって、鉄器時代になっても剣の威信財としての意味は継続していた、あるいはその意味合いが強化されたと解釈できるのである。このことは、剣自体の機能が変化し非実用化したことからも想定できる。逆に言えば、このような儀器化傾向が著しかったからこそ、触角状突起付青銅剣身は象徴的なものとして新たな文化の流入後も生き延びたとも考えられる。

結論

今回の分析によって、カスピ海南西岸域においては青銅器時代後期段階からトランスコーカサス方面をはじめとするより北方との交流があり、その関係は時を経るにつれて性格を変化させながらも維持されていた可能性が指摘できる。また、少なくとも初期鉄器時代文化の中ではそうした要素がある程度重視されていたといえる。それは当該地域における鉄器時代文化の成立を考える際には重要な点であろう。このことはカスピ海南西岸域の初期鉄器時代文化が、トランスコーカサス方面との青銅器時代からの継続的な関係を保ちながら、段階的あるいは漸移的に形成されていった可能性を示唆するものである。

今回対象としたのは限られた地域ではあるが、すくなくともカスピ海南西岸域における鉄器時代文化の形成過程には従来考えられていたよりも漸進的な側面があったということは言えるのではないだろうか。さらに今回指摘したことは、今後、当時の社会の仕組みやその変化をより詳細に解明することに資するのではないかとも考えられる。

一方で、今回対象とした剣自体については柄の形態や製作技法など不明な点が以前多く残されている。1 類以前の系譜についても検討していく必要があろう。今後の課題としたい。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、天理大学附属天理参考館、中近東文化センター附属博物館、東京大学総合研究博物館に資料の実見と発表を許可していただきました。その際、巽善信先生、足立拓朗先生、西秋良宏先生にご支援をいただくと同時に、本研究や対象資料についてのご助言もいただきました。深く御礼申し上げます。

ただし、本稿で述べた見解はあくまで個人的なものであり、その文責はすべて筆者がおうことを申し添えます。

本研究は 2007 年 6 月の第 12 回日本西アジア考古学会総会・大会での発表に加筆・修正したものです。そのような機会を与えてくださった関係各位に謝意を表します。

引用文献

Dyson, R. 1964 Notes on weapons and chronology in northern Iran around 1000 BC. In R. Ghirshman, E. Porada, R. H. Dyson, J. Ternbach, R. S. Young, E. L. Kohler and M. Mellink (eds.), *Dark Age and Nomads c. 1000 BC. Studies in Iranian and Anatolian Archaeology*, 32-45. Istanbul, Nederlands Historisch-Archaeologisch Institute.

Dyson, R. 1977 Architecture of the Iron I period at Hasanlu in Western Iran and its implications for theories of migration on the Iranian plateau. In J. Déshayes, (ed.), *Le Plateau iranien et l Asie centrale des origines à*

la conquêe islamique, 95-112. Paris, CNRS.

Kontani, R. 2005 Searching for the Origin of the 'Bronze Swords with Iron Core' in Northwestern Iran and the Caucasus Region. *Iranica Antiqua* 40: 397-491.

Medvedskaya, I.N. 1982 *Iran: Iron Age I.* BAR 126. Oxford, Archaeopress.

Moorey, P. R. S. 1971 *Catalogue of the Ancient Persian Bronzes in the Ashmolean Museum.* Oxford, The Clarendon Press.

Mousavi, A. 2001 La region de Teheran à l Aube de l Âge de Fer : réflexions et commentaires sur les nécropolis du IIe millénaire av. J.-C. *Iranica Antiqua* 36: 151-212.

Mousavi, A. 2005 Comments on the Early Iron Age in Iran. Iranica *Antiqua* 40: 87-99.

Negahban, E. O. 1996 *Marlik: The Complete Excavation Report*. Philadelphia, University of Chicago Press.

Overlaet, B. 2003 *The Early Iron Age in the Pusht-I Kuh, Luristan (Luristan Excavation Documents vol.IV).* Acta Iranica 40, troisiéme série, vol. XXVI.

Samadi, H. 1959 *Les Découvertes Fortuites Klardasht, Garmabak, Emam et Tomadjan.* Tehran, Mushée National de Téhéan.

Schaeffer, C. F. A. 1948 *Stratigraphie Comparée et Chronologie de l Asie Occidentale.* London, Oxford University Press.

Young, T.C., Jr. 1964 A Comparative Ceramic Chronology for Western Iran, 1500-500 B.C. *Iran* 3: 53-85.

Young, T.C., Jr. 1967 The Iranian migration into Zagros. *Iran* 5: 11-34.

足立拓朗　2003「北西イランにおける耳形柄頭長剣の発達」『青山考古』20 号　85-98 頁。

足立拓朗　2004「古代イランにおける青銅製柄孔付斧の編年試案」『西アジア考古学』5 号　25-36 頁。

江上波夫編　1965『デーラマンⅠ　ガレクティ、ラスルカンの発掘』東京大学東洋文化研究所。

紺谷亮一　2001「古代イランの青銅剣再考－岡山市立オリエント美術館所蔵・バイメタル剣－」『岡山市立オリエント美術館紀要』18 号 21-30 頁。

紺谷亮一　2002「鉄芯入り青銅剣の起源をコーカサスに探る」紺谷亮一・足立拓朗・大津忠彦編『古代イラン秘宝展－山岳に華開いた金属器文化－』94-97 頁　岡山市オリエント美術館。

津本英利　2002「西アジアにおける長剣の系譜」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』19 号　1-23 頁。

西秋良宏・三國博子・小川やよい・有松唯　2006『東京大学総合研究博物館　考古美術（西アジア）部門所蔵　考古学資料目録第 7 部　イラン、デーラマン古墓の土器』東京大学総合研究博物館。

深井晋司・池田次郎編　1971『デーラマンⅣ　ガレクティ第Ⅱ号丘、第Ⅰ号丘の発掘』東京大学東洋文化研究所。

有松 唯
東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
Yui ARIMATSU
The University of Tokyo